

皮膚科研修プログラム

(平成21 年6 月作成)

I. 初期研修: 自由選択

6ヶ月コース(4-9ヶ月の選択)

将来、皮膚科専攻を希望する者を念頭に置いた基礎的プログラムである。しかしながら将来他科希望する者においても皮膚疾患は必見であり、必ずや役立つ内容である。指導医ないしオーベンの下、3-5 名の入院患者を受け持ち、以下項目を体得するコースである。

皮膚科学を将来専攻する予定でないものも、下記の全ての網羅は難しくなるが、1-3ヶ月の期間で選択することができる。

《基礎的事項》

- ① 発疹の見方(観察)と表現(記載)
- ② 皮膚生検と皮膚小手術および植皮術の習得
- ③ 皮膚病理組織の読みと①の臨床所見とをマッチさせ、発疹成り立ちの理解を深める
- ④ MED 測定と光線(PUVA)療法
- ⑤ 皮膚テスト;パッチテスト、光パッチテストなどの実施

《疾患》

- ① 日常的皮膚疾患をまず習得し、治療法を学ぶ。
- ② 皮膚科領域の救急外来と具体的対応:フレグモ-ネなどの足のトラブル、急性蕁麻疹、熱傷など
- ③ 皮膚科領域の感染症の基礎と臨床(細菌、真菌、ウイルス、疥癬):決め手となる顕微鏡による診断法を学ぶ
- ④ 高齢者皮膚疾患の対処
 - ・ 褥創;新しい創傷治癒理論に基づく治療:月2 回の褥創回診への参加
 - ・ 疥癬;新しい治療法と予防策を学ぶ。
- ⑤ 薬疹の習得:急性ウイルス性発疹症との鑑別ができるよう習得する。
- ⑥ 重症薬害・4 つの重症薬疹と副作用救済制度の利用法
- ⑦ 全身疾患の皮膚徴候:入院検査を進め、膠原病などの診断を行い、悪性腫瘍など合併内臓疾患を見出し、当該科または当該施設にバトンタッチする。
- ⑧ 皮膚良性腫瘍および皮膚悪性腫瘍の診断(ダーモスコピーによる観察も含めて)と治療の実施:大きな手術は手術に関するエキスパートを招聘し、手術手技の指導を仰いでいる。外陰パジェット病、悪性黒色腫、有棘細胞癌、基底細胞癌、血管肉腫など。術後の化学療法、放射線療法の実際。

II. 後期専修課程(レジデント)プログラム:3 年間

皮膚科専攻者のためのプログラムである。原則として初期研修期間で上記の皮膚科6 ヶ月コース修了者が対象である。後期研修3 年間の皮膚科専修カリキュラムの具体的な習得目

標は以下の7項目である。すなわち日本皮膚科学会認定皮膚科専門医制度カリキュラムの到達目標に準拠し、皮膚科臨床医としての本格的診療活動を開始し、あらゆる皮膚疾患にベストな対応ができるよう、精力的に多くの臨床経験、研鑽を積む期間として位置づける。学会主催の教育講習会出席のほか、学会発表、論文作成も積極的に行い、当面は専門医取得の早期実現を目指す。社会に役立ち、人間性豊かな皮膚科専門医となることが目標である。

- ① 外来診療の参加(週3-4日程度)
- ② 入院患者の受け持ち(1人5名程度)
- ③ 他科入院患者に関するコンサルトが求められた場合は積極的に関与する
- ④ 関心ある臨床研究テーマを持つ
- ⑤ 学会報告、論文作成など研究成果の発表(専門医取得に必要な単位取得)
- ⑥ 教育講習会、学会などの参加(専門医取得に必要な単位取得)
- ⑦ カンファレンス参加(皮膚科:毎週木曜午後、CPC:月1回、医学教育委員会主催の講演会など)

【注意事項】日本皮膚科学会認定皮膚科専門医取得について:

皮膚科専門医取得のためには学会に入会し、5年間研修していることが必要であり、前期専修課程では学会に入会していれば皮膚科において研修していない期間も研修期間として認められる。皮膚科を専門にするのであれば可能な限り早めに学会に入会することで専門医取得の機会が早まる。

後期専修課程においては当院が主研修施設ではないため、専門医取得のためには当院における研修以外に1年以上の“主研修施設”における後期専修課程以降での臨床研修が必要となる。当院では複数の主研修施設との連携があり、事前にそれらの中から1つの主研修施設に登録の上当院で研修し、加えて専門医取得までに一定期間を登録した主研修施設で研修することになる。